

『復興と児童問題』

東京市 [編]

帝都復興叢書刊行会 [刊]

1924年1月 B6判変形・134頁 図書番号 OF-0166

本書は東京市編纂の「帝都復興叢書」の第2輯である。「帝都復興叢書」は関東大震災から3カ月後の1923(大正12)年12月に第1輯が発行され、その後、ほぼ毎月一冊発行された。

叢書発行の目的を大迫元繁(東京市社会教育課長)は序文「復興叢書の発行に際して」の中で、帝都復興事業は単に外見的な復興や経済の復興だけではない。市民が協力して新しい東京の中身である精神(魂)の復興に努力することである。叢書がそれを実現するための道しるべになればとしている。

本書は医師であり児童保護に携わった三田谷啓によって著された。三田谷は1881(明治14)年に兵庫県西宮市に生まれ、苦学して医学や治療教育学を学んだ。1918(大正7)年に自治体で初めて児童課が設置された大阪市の初代課長に就任し、児童相談所や少年職業相談所・産院・乳児院を創設した。1962(昭和37)年に亡くなるまで児童の保健・医療・教育・福祉の啓蒙や実践を行った。

三田谷は児童保護事業とは「人を造る事業」とし、「民健なれば国強し、復興の根本は民の体力を増進すること」と述べ、復興事業のなかでも重要な事業の一つであるとし、震災後の児童の健康・教育・職業について具体例を挙げて注意を述べた。乳児については、「人生のあらゆき時期を通じて最も抵抗力の弱いものである」とし、病気になった乳児の保護と発育をうながすため適切な処置をおこなう必要があるとする。仮に、病気を患っていない場合でも、家庭で十分な世話を受けられない乳児は、専門医、保母、看護婦などがいる公的施設で保護することが肝要と述べる。また、栄養補給が重要であり、震災後に東京市が行った乳幼児への牛乳の配給は、応急的な手段としては有効だが、「乳児の栄養は母乳を第一とする」と述べる。児童については、「震災のために…甚大の恐怖を受けるとそれが永く神経機能に痕跡を残して将来個人の性格にも重大の影響を及ぼし、それが遂に神経病や精神病になる誘因となり得る」とし、学校が再開されても震災による恐怖感が残るなか呆然とした特徴や何事にも受動的で危険に対して敏感になる症状がみられた。特に孤児となった児童には、「衣食住を与ふることを以てのみ足れりとせず、この著しい心の傷手を成るべく痕跡の残らぬやうに治して置くやうに努めることが肝要だと思ふ」と述べる。

三田谷は最後に、「今回の災禍が日本の上下を通じて社会的精神の訓練上大に資するところがあつたとすればそれは実に慶賀すべきことである」とし、震災によって他人の悲しみを自分の悲しみとする機運が社会全体に起つたが、平時でもこの気持ちを持つことが大切であるとする。また、「衆と共に憂ひ衆と共に喜ぶ精神が国民の中に勃興せば遂には國亡びて山河遺るの外に道がない」と述べる。復興事業で一番大切なことは、この精神を家庭教育・学校教育・社会教育で児童に植え付けることにあるとする。なお、本館は本書のほか、第4輯「詩集 市民の歌へる」(図書番号・OK-0064)、第6輯「御成婚と精神作興」(図書番号・OE-0134)を所蔵している。

(平田幸子・市政専門図書館司書課長)